

新地っ子の夏休み 2013 報告書

宮城県との県境にある沿岸の町、福島県新地町の子ども達 35 人が、夏休みの 4 日間を仙台の秋保温泉で過ごしました。

子ども達のキャンプ生活を様々な角度からご報告します。



目次

1. 実施概要	02
2. 事業の経緯	03
3. 「新地っ子の夏休み」3年を経て	
●子どもの内部に「ある」が根づくことを願って	04
寺出 壽美子 (NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会理事長／東京YWCA青少年育成事業部会委員)	
●すこし遠くから	05
白井 裕介 (カメラマン)	
4. 保護者へのアンケートから見るキャンプ	06
5. キャンプ日誌	11
6. スタッフ ① (青年リーダー / チーフリーダーの感想)	14
6. スタッフ ② (料理担当 / 責任者)	34
7. スタッフ紹介	37
8. ご協力いただいた方々、機関、団体	38
9. 資料	39



1. 実施概要

【目的】 東日本大震災で被災し、また、原子力発電所事故による放射能汚染の危険と不安の中で福島県の子どもたちは物理的にも心理的にも我慢を強いられる生活を送っている。その子ども達が、夏休みの数日間、安心して過ごすことのできる環境でのびのびと楽しい共同生活を過ごすことにより、心と身体を癒し、希望をもって生きる力を取り戻すことへの一助とする。また、2011年より継続して福島県相馬郡新地町にある3小学校の子ども達を対象としているが、今夏は中学生もジュニアリーダーとして受け入れ、広い年齢幅の子ども達がキャンプ生活によって「新地町の子ども」として相互につながり、新しいコミュニティを作る次世代育成につながることを期待する。

【実施期間】 2013年8月18日（日）～21日（水）

【実施場所】 仙台市秋保温泉「木の家ロッジ村」

【参加者】 福島県相馬郡新地町の小学生3～6年生：35名／運営に関わった大人28名
*申込多数のため、中学生の受入を取りやめ、さらに定員を30名から35名に増やした。

【主催】 公益財団法人東京YWCA被災者支援プロジェクト

【後援】 新地町教育委員会

【協力団体】 NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会、明治大学震災復興支援センター
上智大学コミュニティ心理学研究室

【資金的援助】 東洋英和女学院／三菱商事株式会社

【プログラム内容】

	18日(日)	19日(月)	20日(火)	21日(水)
8:00		朝食	朝食	朝食・お掃除
9:00		自由遊び	陶芸体験	10:00出発
10:00			和太鼓体験	↓ 貸切バスで新地町へ！
11:00	新地町出発		お買い物	
12:00	↓ 貸切バスで秋保温泉へ	昼食	昼食	新地町到着
13:00	グループ毎に好きな場所でお弁当	自由遊び	自由遊び	
14:00				
15:00	キャンプ場内サイト巡り			
16:00	自由遊び(川遊び、キャビン内遊びなど)			
17:00			みんなでバーベキュー	
18:00	夕食	夕食		
19:00	自由遊び	自由遊び		
20:00			自由遊び	
	お休みなさい	お休みなさい	お休みなさい	

*黄色の部分はグループ毎に過ごした時間、緑色はみんなで過ごした時間



2. 事業の経過

2013年

2月24日（日）キャンプ場下見、放射線量測定

6月27日（木）寄付の申し出により実施を決定

7月4日（木）新地町教育委員会をとおし、対象となる子ども達にチラシ配布

7月8日（月）キャンプ場下見、新地町教育委員会にて打ち合わせ

7月12日（金）スタッフミーティング：概要の検討

7月27日（土）リーダー研修・リーダー会

7月29日（月）リーダー研修・リーダー会

7月30日（火）新地町役場にて参加者と保護者対象に準備会開催

7月31日（水）リーダー研修・リーダー会

8月8日（木）リーダー会（作業日）

8月17日（土）キャンプ場にて下見およびリーダー会

8月18日（日）～21日（水）「新地っ子の夏休み2013」実施

8月28日（水）参加者保護者にアンケート送付

9月23日（月）リーダー会（振り返りの会）



3. 「新地っ子の夏休み」3年を終えて

～ 子どもの内部に「ある」が根づくことを願って ～

寺出 壽美子 (NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会 理事長／東邦大学 薬学部講師／東京YWCA 青少年育成事業部会委員)

3回目を迎えた『新地っ子の夏休み』の今夏の参加者は35名でした。思い起こせば、大震災直後の2011年8月に実施した1回目のキャンプは試行錯誤の連続でした。実際、初めて立ち上げる組織や事業は、それがどんな組織や事業であっても、企画・運営・予算・人員すべてに膨大なエネルギーと叡智を要求されるものです。1回目のキャンプでは、巨大なマグマを噴出し続けた子どもたちを無事に元気な姿で新地町に送り届けられるか、そのことだけを願ってキャンプを終わらせたと記憶しています。「新地っ子の夏休みキャンプ2013」は、YWCAの2名のスタッフ以外は本業を別に持ちながらのボランティアでの参加で成り立っている事業です。そのため、準備の内容や時間は、絶対的に不足の状態が進められています。それでも私は大震災による津波や原発事故の影響を受けている一番の弱者である子どもたちが4日間、自然の中で友だちと思いきりまじけてほしい、もし内部にさまざまな種子をくすぶらせているならば思いきり発散させてほしいと、ただその思いだけで3年間、関わってきました。

今年のキャンプでは、予算を確保できるかが直前まで懸念されていましたが、外山さんの尽力によって、それも杞憂に終わりました。一昨年昨年と2度のキャンプを踏まえて、今夏のキャンプでは極力プログラムを最小限に抑えること、また、結果としてメインの食事は少人数での調理になったことが過去の2回と大きく異なる点でした。けれども、子どもたちの多くが「キャンプが楽しかった」「食事が美味しかった」とアンケートに回答してくれていることがわかって、まずはほっとしています。

大震災から2年半が経過して、4年生の子どもは6年生になりました。子ども自身の成長・発達や新たな人間関係、新規の学習、そして家族関係の紆余曲折等、この2年半の中で一人ひとりが一人ひとりの固有の軌跡を描いていることと思います。かなり以前に出会った30歳のYさんは、幼少期の虐待とその後のひきこもりの体験を経て、「私が社会に出て人と交わることができるようになったのは、たった1回だけですが、幼少期に優しいお姉さんと出会って、その時、幼児だった私はただ話し続け、お姉さんはただひたすら聴き続けてくれて…。今の私があるのはそのお姉さんとの出会いがあるからだ」と最近になって気づきました。」と、語ってくれたことがあります。人は人との関係の中で、変化したり変化しなかったりするものですから、人が変化したかどうかについては、早急な結論は避けたいと思います。

安心して安定して生きていけるようになるには、受けとめられるという体験を何回も繰り返し受けなければなりません。そして、受けとめられる体験を繰り返し受け続けた子どもは、やがて、生きていく基盤「ある」を自らに根づかせて、自分自身を受けとめることができるようになっていきます。そして今度は他者に依存しないで「ひとり」になることができるようになり、さらに他者を受けとめることができる存在へと成熟していけるのです。キャンプを継続していく意味は、ここにあると思っています。

子どもたちの知らず知らずの日々の積み重ね、人と人との出会いの中で、子どもたちの内部に生きていく基盤「ある」が根づいていってくれたら、望外の喜びです。「新地っ子の夏休みキャンプ2013」に関わっていただきましたすべての皆様に感謝申し上げます。



3. 「新地っ子の夏休み」3年を終えて

～ すこし遠くから ～

白井裕介（カメラマン）

雨がずっと降った、一昨年八月。野尻の、湖や森やキャビンは深い緑色で、でもぼんやり黄色っぽく、汗のにおいや、かなりの湿度があった。昨年の七月。よく晴れた。山中湖はぴったりと夏休みのような天候で、青も緑も濃かったが、深くはなかった。ふわふわとした景色が印象として浮ぶが、そんな曖昧な記憶は、全く違っているかもしれない。事実が、過ぎて経っていく時間と同じように移り変わっていき、切ない。縁があり、きっかけを頂いて、「新地っ子の夏休みキャンプ」に、参加させてもらった。

今年も含めて、結果的にすべてでお世話になった。写真を撮る係として、すこし遠くから、撮ったり撮らなかつたりして眺めた。

愛おしくて、元気いっぱい、寂しそう、優しい彼らが、色々に弾ける。一昨年のはじめてのキャンプの、深い衝撃。爆発した彼らのパワーは、激しい遊びや言葉になり、それは時に人やものへ直接向いた。湖へ飛び込み、弓を引き放ち、異常に笑い、走り転び、美しい絵を描き、アートな工作を完成させ、叫び、疲れ、たくさん甘え、たくさん頼張り、時々傷ついて、変な顔でふざけておどける。子どももリーダーも全力の姿。真逆ほどの想像があった自分が頼りなく、子どもたちの楽しむ大きさもまた、想像を超えた。

キャンプファイヤーの火を見つめながら、ある子が泣いた。次の子が泣き、次の子が泣き、泣いて、泣いた。楽しい分だけ寂しさが残り、寂しい分だけ、楽しんでいただろうか。子どもと大人、すすり泣く声が響くオレンジの風景が、ドキドキして、焼きついた。

二年経ち、今年。新地から近い仙台の溪谷。家族連れなどが休日を通り過すの中で、彼らはよく馴染んでいた。日常にあるような、ゆったり流れる夏休みの数日間。久しぶりに見る成長した子たちや、はじめて見る清々しい顔の子たちを、ベテランのシニアや、のびのびしたリーダーたちが見守った。「ひさしぶり」や「いっしょにきて」と、話しかけてくれる言葉があったが、やっぱりうれしい。

子どもと大人の、落ち着きや、穏やかな空気。去年、そして今年と、明らかに様子は変わっていった。時間の経過は、彼らを変えた。

その時間の経過がまた、私たち大人の気持ちまで変えた気も少しする。もしかすると感じた変化は、大人の錯覚なのかもしれない。

カメラを持ち、かけ回り、少し話し、たまに隠れた。笑う顔や、疲れている顔や、やわらかい顔や、憂いのある顔が常にあり、瞬間瞬間で変わる表情を、美しい画として残そうとすることが、何だか弱々しくてたまらない。始まる前、はじめて新地町の沿岸へ訪れ、写真を撮った。高い建物の少ないそこには、光が異常に回り、空が青く広がっていて、家が建っていたであろう跡には、鮮やかな緑色の草と、黄色の花が咲いていた。子どもたちは、どういう大人になっていくのだろう。そんなことを考えていた。たくさんの思い出がみんなの中に出て、手元には、たくさんの写真が残った。思い出は思い出さないと思い出にはならないのだろうか。

忘れてしまう事、忘れるべき事、忘れられない事など、それぞれに様々ある。経験した子どもたちや大人たちは、何を思うのだろう。

東京に戻って、写真をめくりながら、またぐるぐると考えている。思い出にする手がかりとして、すこし遠くから、考えている。

最後になりましたが、かけがえのない経験をさせて頂きました。東京 YWCA をはじめ、携わっておられましたすべての方々へ感謝致します。そして、新地っ子の皆様へ。ありがとうございました。また会いたいです。



4. 保護者へのアンケートから見るキャンプ

【参加者概要】

性別	人数
男子	20
女子	15
計	35

学校名	人数
新地小	12
福田小	10
駒ヶ嶺小	13
計	35

学年	人数
3年生	8
4年生	15
5年生	3
6年生	9
計	35

【アンケート概要】

アンケート回答者：参加者 35 名に送付、27 名分回収（回収率 77%）

回答者	人数
父	2
母	15
その他	0
計	27

Q 1. 今年のキャンプの日数（3泊4日）
 についてはどう思われますか？

キャンプの日数	人数
適切	18
短すぎる	7
長すぎる	2
未記入	0
計	27

Q 2. 開催時期についてはどう思われますか？

開催時期	人数
8月上旬	12
8月中旬	4
8月下旬	3
夏休み中ならいつでも	9
未記入	0
計	28

Q 3. キャンプ中の食事は全体として
 いかがでしたか？

食事	人数
おいしかった	22
普通	5
おいしくなかった	0
計	27

Q 4. キャンプリーダー（若いお兄さんや
 お姉さん）の対応はどうでしたか？

リーダーの対応	人数
とても良かった	25
良かった	0
普通	1
あまり良くなかった	1
計	27



4. 保護者へのアンケートから見るキャンプ

Q 5. 今回のキャンプにお子様を参加させようと思った理由は、次のどれですか？

参加理由(複数回答)	人数
のびのびさせてあげたかった	12
自然の中で過ごさせてあげたかった	18
気分転換させてあげたかった	15
他の小学校の子と親しくなって欲しかった	11
たくましくなって欲しかった	13
集団生活の中で協調性を身につけて欲しかった	20
ストレス発散させてあげたかった	7
規則正しい生活を送らせたかった	5
その他	4
子どもが参加したいと言ったから	2
親元から離れて同年代の他の小学校の子とも生活させてみたかった。なにか気がつき成長して欲しかった	1
自分で身の回りのことをきちんとできるようになって欲しかった	1

Q 6. 次の中で楽しかったものはどれですか？当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

楽しかったこと(複数回答)	人数
バスの中	9
キャンプ場の散歩	7
川遊び	26
広場での自由遊び(バドミントン、ブーメランなど)	17
部屋の中での自由遊び(クラフト、ゲーム)	22
部屋の中でのおしゃべり	21
部屋での食器洗い、掃除など	5
お風呂の時間	14
陶芸体験	15
和太鼓体験	7
その他	2
バーベキュー	1
お買い物など、ぜんぶ！	1

Q 10. もし来年の夏、小学生や中学生を対象とした今回のようなキャンプがあったらまたお子様を参加させようと思いますか？

来年度の参加	人数
ぜひ参加させたい	22
できれば参加させたい	4
その時にならないと分からない	1
参加させたくない	0
計	27

Q 11. キャンプ後の様子はいかがですか？

キャンプ後の様子	人数
特に心配なことはない	24
少し心配なことがある	2
未記入	2
計	28



4. 保護者へのアンケートから見るキャンプ

◆自由記述回答◆

Q. キャンプリーダーに伝えたいこと。

- 来年もあいたいです。
- とっても楽しいキャンプでした。夏休みの思い出ができました。グッチさん、ありがとう。
- とても楽しかった。
- ケチョンさん、マーポーさん、4日間お世話になり、ありがとうございました。いっぱい遊んでもらって、普段の生活の中でも2人の名前が出てきます。それだけ楽しい時間だったんだなと感謝しています。夏休みの思い出を作っていたいただいて、ありがとうございました。また、来年お会いできればと思います。
- いっしょにキャンプですごせて楽しかったよ!!
- 一緒に遊んでくれてありがとうございました。とても楽しかったです。(2)
- 「また遊んでほしいな」との事です。
- 4日間ありがとうございました。とても楽しかったです。
- 他校の子やリーダーたちと楽しく遊べてうれしかったし、とても楽しかったので今度もキャンプがある時はぜひさんかさせていただきたいです。
- リュウリュウさんとかずきさん、大学でもがんばって下さい。来年も会いたいです。
- 夜中まで遊んでくれてありがとうございます。水切りや大富豪を教えてくれてありがとうございます。人生ゲームも楽しかったです。来年も参加します。
- ウノをいっしょにしてくれて、ありがとうございました。
- わがママを聞いていただき、ありがとうございました。
- 優しく接していただいて、ありがとうございました。
- 不出来な娘の面倒みて頂き、さらに楽しい思い出をつくって頂き、本当にありがとうございました。来年も行きたいと言っていますので、来年もぜひ参加させたいと思います。

Q. 今回お子様をキャンプに参加させてよかったことは何ですか？

- 気持ち的にしっかりしたのかなと感じられます。
- ストレス発散になり、とても良かったです。
- 夏休み、どこにも連れて行ってあげることが出来なかったのが、今回のキャンプは本人にとっても、すごく楽しんでくる事が出来た様でした。
- 親元を離れて過ごす機会ができて、とても良かったです。
- 思い出作り。
- 「楽しかったよ」と帰って来たので、キャンプに参加させて良かったと思いました。帰ってきた日は、キャンプ中の話をずっとしていました。家族と離れて泊まりに行く事がなかったので、全て自分でできるか心配でしたが、皆とのキャンプを思う存分楽しんできた様子だったので、親としても参加させて本当に良かったと思いました。
- 帰って来ると笑顔で話をしてくれたこと。
- 初めてのキャンプで、いろいろな体験をさせてもらって、たくさんの思い出が出来て、参加させて良かったと思います。家族以外で、こういう体験が出来る機会はなかなかないので、本当に貴重な時間でした。子どもも親も大満足です。
- 他の学校の友達が出来た事。
- 帰宅してから、進んで手伝いをしてくれるようになりました。
- 帰ってきた時に話がとまらないくらいキャンプの思い出を話してくれました。
- 初めての一人でのお泊りだったので、毎日電話が鳴るんじゃないかと心配していました。でも、帰って来た時の笑顔を見て安心しました。
- 集団生活の大切さを知ることができました。自然の中でテレビやパソコン、ゲームなどと離れることがとても良かったです。とってもたくましくなって帰って来た気がします。
- 原発事故から外でもあまり出なくなり、制限ばかりさせた生活の中、大人でもストレスがたまりませんが、今回の「新地っ子」ありがたいです。ぜひ続けて下さい。すばらしい企画ありがとうございます。



4. 保護者へのアンケートから見るキャンプ

◆自由記述回答◆

- 自分から手伝いをするようになった。笑うようになった。
- 夏休みに楽しい思い出ができて、宿題の作文を上手に書くことができました。／川遊びをしたことがなかったのですが、どじょうなど、いろいろな生き物が見られて良かったです。
- 喜んで帰ってきた事。
- 自分で食事を作ることの楽しさを知ること／親元を離れても自分で出来ること等の気付き／自然（川遊び）を体験出来たこと（キャンプも）
- 思いっきり体を動かした様で、ストレス発散が出来た様です。リーダーがとても良い方だった様で、夜中までゲームにつき合って頂いたとの事。なかなかこのような体験は出来ないの、良かったです。ありがとうございました。
- 他の小学校にお友達が出来たこと、たくさんのグループの子とお話をして来た事を家で教えてくれました。普段した事のない川遊びも印象に残っていた様で、いい体験ができたようです。
- 楽しかったことを話すようになった。話し方が少し上手になった。
- 他の小学校の子どもとの交流や親のいない生活で、少しだけ大人になったのかなと思います。
- 友達ができたこと。
- 楽しく、のんびりと過ごせたこと。他校にも友達ができたこと。少しずつ自分で身の周りのことができるようになったこと。

Q. 今回お子様をキャンプに参加させるにあたって、困ったことや心配だったことは何ですか？

- トイレ（夜中に行きたくなったら・・・）。荷物の整理整頓。食事の準備など（家では何もやっていないので・・・）
- 皆と協力してすごしているか心配でした。
- 自由過ぎるところがあるので、迷惑をかけていないか心配でした。
- 食べ物の好き嫌いや自分勝手なことをしてしまうのではないかとということ。
- 大人の方が多かったので、川遊びやバス移動などは心配していませんでした。身のまわりの事ができるか？忘れ物をせずに帰って来るか？という本人の日常生活を見ていて、心配事はありました。
- 他の小学校や大人の人達と仲良くできるか、言う事をきけるか心配だった。
- 前回は参加させて頂いたので、すべておまかせしました。子どもは、何の不安も感じず、とても楽しみにしていました。心配事は天候だけでした。
- 地震と豪雨が心配でした。川で流されたりはしないのかという心配はありました。
- 川で遊ぶのは心配だった。
- キャンプ前日に体調をくずしてしまったので、楽しめるかが心配でした。
- 親元から離れるのが初めてだったので、ちゃんと生活出来るか心配でしたが、そう思っていたのは親だけでした。「取り越し苦労」でした。
- 我が家は本人と妹が年子だったため、下の子（小2）がキャンプに行けなく、騒がれたのが悩みでした。
- 家族で離れて、一人で寝ることができるか。何か困ったときに自分で解決できるか。新しい友達と仲よくできるか。楽しむことができるか。
- 親元を離れて過ごすのが初めてだったので、4日間、自分の事がきちんとできるか心配でした。（でも、キャンプリーダーさん達にお世話して頂いて、4日間、何事もなく元気に楽しく過ごせました）
- 言葉遣いが悪い時があるので、きちんと接する事が出来るか心配でした。
- グループの子たちと仲良く過ごせるかなあ??体調は悪くなっていないか。
- 私達家族の方が、家の中の太陽が居なくさみしい気持ちになりました。特に困った事はありません。心配は途中で帰りたいと言い出すんじゃないかと（笑）。
- キャンプをしたことも、一人で長期間家族と離れることも初めてだったので、親のほうがか心配でした。でも・・・子どもはそんな心配は少しもありませんでした。親のほうがかさびしかったです・・・。



4. 保護者へのアンケートから見るキャンプ

◆自由記述回答◆

Q. 今回のキャンプ主催者（東京 YWCA）に対して伝えておきたいことは何ですか？

- 福島というだけで、風評被害、とても残念ですが、みなさんの愛情を子ども達も感じていると思いました。本当にありがとうございました。
- 4日間、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。
- 新地町の子ども達をキャンプに連れて行っていただき、ありがとうございました。スタッフの皆さん、大学生のお兄さんお姉さんに親切にいただき、感謝しています。
- 地方ではこういった企画が少なく、子どもたちだけのキャンプ、自然体験が少ないので、今後もぜひ続けていただきたいです。大変お世話になりました。チームについて：同学年の場合は他校の子とチームを組ませて欲しいです（特に高学年の場合）。
- とにかく楽しくて仕方なかった様です。同級生と一緒に外で思いっきり遊ぶ事がないし、まして他学年、他校の子と一緒に遊ぶ機会もほとんどありません。未就学児の遊び場ばかり注目されていますが、小学生の遊び場もなかなか確保出来ないのでは、この様な体験がさせられるというのは、とてもありがたい事です。
- 昨年も参加させていただきましたが、体調がすぐれずに、帰宅後大変悔しがっており、今年も募集が来た時、是非参加したいと言っていました。無事、キャンプを終えてこれ、とても喜んでいました。参加させていただきありがとうございました。
- 四日間本当にお世話になりました。ありがとうございました。
- 今回はグループでの行動が多かったと聞きました。できればもう少し他のグループとの交流があればいいなと思いました。
- 今後もこのような機会を作ってください。
- 3泊4日間、たいへんお世話になりました。親元を離れて、少しでも自立してほしい、参加させました。この経験で、たくましくなり、次へ生かしてほしいと思っています。
- 今後もどんどんこういう催しを行ってほしいです。
- 楽しく過ごしたようです。ありがとうございました。
- このような機会をもうけて頂いて、本当に感謝しています。ありがとうございました。
- 大人の方が多く、安心して子どもを預ける事ができました。
- 大変お世話になりました。ぜひ、毎年続けて下さい。
- 貴重な体験をさせて頂いて、ありがとうございました。帰ってきてひとまわり大人になった様な気がして、うれしく思いました。これからも続けていてほしいです。また、参加させてもらいたいです。お世話になりました。
- 今回のキャンプでは、私達では体験させてあげられないような川遊び・陶芸などをさせていただいてありがとうございます。次回があれば、弟も参加させたいです。
- とても楽しく過ごす事が出来たようです。ありがとうございました。
- このような機会を秋頃などにも作っていただきたい。
- 本当に良い経験をさせていただきました。ありがとうございました。これからもこのような活動を提案していただけるのなら、又、参加させていただきたいと思います。
- 震災以降ずっと支援を続けていただき、本当に感謝です。このご恩を恥じないよう、しっかり子どもたちを育てていきたいと思っています。本当にありがとうございました。



5. キャンプ日誌

記録：齊藤 崇

【初日】8月18日(日)

新地町農村環境改善センターに集合。出発の挨拶をして、11時に秋保温泉キャンプ場へバスで移動する。車内では、毎年参加している子どもたちを中心に、とても賑やかにおしゃべりしている姿がみられた。バスに酔う子どももおらず、スムーズにキャンプ場へ到着。班ごとに昼食をとり、キャンプ場内のオリエンテーションをおこなった。その後は、班ごとに貸し切っているテニスコートでバトミントンやフリスビーをしたり、キャビン内で過ごしたり、全体では川遊びをおこなった。明日以降にそなえ、水着などは簡単に洗って、用意したヒモに干した。16時以降は、基本的に各キャビンで班ごとに過ごす。トランプや人生ゲーム、ウノ、ジェンガ、お絵かきなど、班ごとに自由に過ごす。また、キャビンを出て、散歩をしたり他のキャビンに遊びに行く子どももみられた。お風呂は班ごとに順次、入った。子ども達の要望によっては、食後に入る班もみられた。初日の夕食は準備にやや時間がかかったが、19時には食べ終わり、そのまま班ごとに部屋で過ごした。

◎夜のリーダー会

各班のリーダーから、初日の子ども達の様子について報告をおこない、明日の予定についても確認をおこなった。子ども達の様子では、体調に心配な様子が見られる子やまだお友達ができずに表情がさえない子、リーダーにべったり甘えている子などの報告があがった。そうした子ども達への明日以降の対応について等を打ち合わせ、班によっては、リーダーの数を増やすなど、調整をおこなった。食事でも班ごとに余ったりしているところもあり、明日以降の参考にした。また、明日からの本格的な川遊びに備えて、注意点の確認をおこなった。川にもブヨなどがいたため、明日も虫よけスプレーの声かけをするなど、徹底するように確認した。本日は、川で小さな擦り傷の怪我を負う子どもがいた。本日に続いて、明日も晴天が予想されたため、水分補給の声かけについても確認をおこなった。

【2日目】8月19日(月)

前日に続いて良く晴れ、曇る時間帯もあったが、日差しは強かった。7時頃には、ほとんどの子どもが起きていた。朝食も班ごとに簡単な調理をして食べ、10時頃からは川遊び、水鉄砲、テニスコート(フリスビーやバトミントンなど)、各キャビンの4ヶ所に別れて遊んだ。11時から子ども達の体力を考慮して、川遊びを無しにした。昼食後に休憩を入れて、13時30分から再び川遊び、水鉄砲、テニスコート、各キャビンに別れて16時まで遊ぶ。子どもたちには、男女を問わず、川遊びや水鉄砲遊びが人気であった。水鉄砲は、他のキャンプに来ていた方々に気を使いつつ、キャビン前の空いている場所でおこなった。子ども達は水着やゴーグルなどをして、大声を出しながら楽しんでた。川では生き物を探したり、石を並べたり、水切りをしたり、子ども達は思い思いにリーダーたちと楽しんでいた。ただし、川の深さが膝下ほどだったこともあり、6年生の男の子たちには、やや物足りない様子もみられた。そのため、16時前の30分間だけ、条件をクリアした6年生の男の子1名は、川の深いところに行って、リーダーと泳いだりして楽しんだ。



5. キャンプ日誌

夕食の際には、服薬のことで自ら確認をしてくる子どもが多く、とてもしっかりしている様子がみられた。女の子のキャビンでは、入口のドアに、折り紙をつけたり、貼り紙をつけたり、班ごとの個性がでてきた。夜も班ごとにキャビンでゲーム等をして過ごし、就寝した。

◎夜のリーダー会

各班から昨夜の就寝時間と今朝の起床時間の報告を受ける。深夜まで起きていた班や起床時間が早い班などがあった。本日はお昼寝をしている子ども達も数人みられた。子ども達の様子については、各班ともに、子ども同士のコミュニケーションが増え、初日に大人としか話さなかった子どもも徐々に班に馴染んできている様子が報告された。特に、室内での遊び(人生ゲームやウノ、ジェンガ、トランプなど)で盛り上がっている様子が報告され、子ども達の関係づくりの大きなきっかけとなっていた。班の中でお手伝いを全くしない子どもがおり、その子への対応について検討した。基本的には、そのまま様子を見て、無理にお手伝いをさせるようなことはしないように確認した。夜、暗くなってから、子ども達がキャビンを出てウロウロしている姿があったため、各リーダーは自分達の班の子どもがどこで何をしているのか等を把握するように、改めて確認をした。初日の夜に寝返りをうったり、うなされている女の子が1名いた。リーダーが子どもを途中で起こして水を飲ませる等の対応をし、就寝することができた。明日の陶芸と和太鼓のプログラム、おみやげの購入、バーベキューに向けて、リーダーの役割や流れ、子どものアレルギーや喘息などの確認をおこなった。特に、午前のプログラムに参加したくない子どもが1名おり、対応について検討した。明日の朝、参加への促しは改めてするが、最後は本人の意思を尊重することにした。その他、コップを割ってしまう班がみられたため、リーダーも注意するように喚起した。疲れのみられるリーダーもおり、班内で休める時には休憩をとるように話し合った。

【3日目】8月20日(火)

前夜遅くから雨が降り、この日は朝から雨が降り続いていた。朝は7時30分ごろまで寝ている子どももおり、全体的にゆっくりした起床時間だった。雨の中、9時にキャンプ場を出発し、和太鼓と陶芸のプログラムへ移動した。和太鼓は13名(全員男子)、陶芸が21名(女子が15名、男子が6名)で、一名がキャビンに残ってリーダーと過ごした。最初にそれぞれのプログラムに別れて過ごし、陶芸ではリーダーたちも子ども達と一緒に真剣に作品を作っていた。12時頃に陶芸の子ども達が和太鼓の方に来て、和太鼓の披露会を行う。和太鼓を披露した子ども達の中には、達成感からか、目に涙を浮かべる子どももみられた。その後に陶芸の敷地内で記念の植樹をおこない記念撮影をした。キャンプ場に戻る前には、近隣の旅館にて、子ども達はおみやげを購入した。限られた予算の中で、子ども達は一生懸命におみやげを選んでいった。昼食後、14時30分から16時までには、水鉄砲遊びや各キャビン内でトランプやウノ、人生ゲーム等、思い思いに過ごす。特に男子の班ではキャビン同士での交流が活発だった。午後には雨はやんでいたが、午前中の雨のため、川遊びはおこなわなかった。



5. キャンプ日誌

16 時から入れる班は入浴し、17 時になるとバーベキューを始める。火をつけるのに時間もかかった班もあったが、比較的スムーズに調理に取り掛かることができていた。子どもたちは、火をつけたり、火が消えないように一生懸命に内輪で仰いだり、焼けた食材を配ったり、それぞれに動き回っていた。女の子の班では食材が残ってしまうところもみられた。牛肉アレルギーがある子どもは、事前に保護者に確認し、牛肉も食べた。19 時 30 分には終了し、お風呂に入っていない班は入浴をした。また、入浴を済ませていた班の中には、肝試しをしたいと希望する子ども達があり、男女 10 名ほどでキャビン内の暗い所を歩き、簡単な肝試しをおこなった。この日は疲れもあってか、早く眠る子どもが多かった。また、女の子のキャビンでは、子ども達が持参してきていたお菓子をもち寄り、お菓子パーティーをして楽しんでいた。女の子のキャビン同士での交流は、それまであまりみられなかったので、女の子たちもかなり馴染んできていることがうかがえた。

◎夜のリーダー会

子ども達の様子では、班の中で上級生が下級生をリードしたりする場面も報告されるようになった。一方で、班の中で関係性が心配される子どもたちもいたが、その都度、リーダーが対応して大きな問題にはならなかった。和太鼓のあとで、表情が変わった上級生の男の子たちもみられた。また、やりたいこと等があっても自分の気持ちを言わない女の子がいたが、自分の気持ちをリーダーに話せるようになった。男の子の中で、リーダーへの暴力が強い子どもがみられたため、夕方に一度、班で集まって話し合いをおこなった。その後、子ども達の様子は落ち着いていた。明日で最終日ということもあり、子ども達には寂しがる言動がみられた。具体的には「来年も来たい」「リーダーのケータイ番号を教えてください」等があった。リーダーの一人が、コップを洗っている際に割ってしまい、指を怪我した。バーベキュー後に通院して、縫う等の大事にはいたらなかった。最後に明日の流れを確認した。特に荷物の忘れ物や、写真撮影などについて話し合った。

【4 日目】8 月 21 日（水）

最終日は朝からよく晴れた快晴であった。この日もゆっくり寝ている子どもが多かった。朝食後は、班ごとに部屋の掃除や帰宅の準備を行い、班ごとと全体とで記念撮影を行う。10 時 30 分にキャンプ場を出発して、新地町農村環境改善センターへ向かった。車内でも子ども達は終始元気がよく、キャンプ中を振り返って、同乗していたリーダーたちとお話などをしていた。到着後は保護者の方にキャンプ期間の様子を報告して、解散をした。お迎えに遅れてくる保護者は、ほとんどおらず、比較的スムーズに引き渡しを終了する。子ども達の中には、帰りたくないと言っている保護者に訴えている子もいた。



6. ① 青年リーダーの感想

石村 正憲（日本子どもソーシャルワーク協会）

1. キャンプ中の子どもたちの様子

全体的に見て子どもたちは、キャンプ中元気いっぱい楽しんでくれていました。親から離れて、キャンプ中に過ごした時間は子どもたちにとって特別なものだったのかもしれませんが、しかし、元気いっぱい楽しんでくれている反面、キャンプ中、子どもたちは様々な形で大人たちに意思表示を出してくれていました。例えば、自分の思い通りにならないで暴れだす子どももいれば、自分の寝泊まりするキャビンから抜けだして外で遊びまわる子どももいました。また、キャビンの中で大人しくしていてもやることなく縮こまっている子どももいました。大勢でいるときは楽しそうに振舞っていても、キャビンに戻ると普段と違う環境に不安を感じて様々な形で、意思表示を出していることが1日目に伝わってきました。しかし、子どもたちはその時々でいろんな表情を見せてくれます。2日目になると、いつの間にかキャビンの子どもたち同士で仲良くなり、一日中キャビンの中でウノをして過ごしていました。最初のうちは、自分たちがキャンプ中、何をすればいいかわからなくて、キャビンの外に出ていってしまうこともありましたが、毎回の食事の時間や朝起きてから布団を畳むなど、ちょっとずつ自然と自分からリーダーのお手伝いをしてくれました。キャビンの中で皆が仲良く過ごせるように、一番年上の子どもが口げんかを止めに入ったり、悪口を言ったら注意したりと、1日目の様子からは考えられなかったような子どもたちの変化も見ることができました。

2. 自分の役割と反省

今回、ケチョンというニックネームのリーダーと2人でG3キャビンを担当しました。最初のうちは、どのような形でそれぞれのリーダーが子どもたちと接すればいいかを考えながら、子どもたちと接していました。しかし、2日目にはそれぞれのリーダーの役割が決まり、ケチョンはいじられキャラとして定着して、私は子どもたちに何をやるかを提案したり、今後のスケジュールから子どもたちに指示を出すことが多くなりました。役割が決まってからは、リーダーと馴染んでいき、子どもたちの表情も明るくなったと思います。今回の私自身の反省としては、他のキャビンのリーダーとの情報のシェアや協力が足りなかったのではないかと感じました。それぞれのキャビンで過ごすことが多いので、自分の担当する子どもたちやリーダーとのやりとりはうまくできていたと思うのですが、例えば、自分の担当する子どもが外に出たときに対応が遅れて、他のリーダーにお世話になったり、自分のところのキャビンに他の子どもたちが遊びにきたときに、他のリーダーに情報を流すのが遅れてしまうことが何度かありました。リーダー同士の協力がもう少しできていれば、それぞれのリーダーの負担も軽くなったのではないかと感じました。

3. キャンプに参加した感想

スタッフさんのフォローや他のリーダーの協力もあって、とても楽しい時間を過ごすことができました。今回のキャンプはイベント盛りだくさんというよりも子どものやりたいことを優先する形だったので、とても楽しむことができたと思います。私は小さい頃から家族で毎年キャンプに行っていたので、キャンプ自体は慣れているのですが、大勢でイベントが盛りだくさんなキャンプだったら、負担は大きかったかもしれません。しかし、今回のキャンプは家族で行くキャンプのように、子どもたちが何もしない時間があつたからこそ、子どもたちが自分からやりたいことを提案できたのではないかと感じます。子どもたちが自分で考えて、やりたいことができる環境はすばらしいと思います。ぜひ、次回もこのようなキャンプがあれば参加させてもらいたいです。

今回は、楽しい時間を提供していただき、ありがとうございました。



6. ① 青年リーダーの感想

上野 星良（明治大学 1年）

- ① 今回のキャンプはあまり決められたプログラムというものが少なく、自由な時間がたくさんあったため、子どもたちの意思で行動する場面が多く見られました。川沿いのロッジでの活動でしたが、キャンプ初日子どもたちが現地に着いて、初めに彼らが興味を持ったものは、川でした。多くの子どもたちが川遊びをしたい、川に入りたくて騒いでいて、私が担当した班の子達も全員、川好きと元気よく話していました。実際の川遊びでは、水を掛け合ったり、石投げをしたり、石を積み上げてダムを作ったり、また、オタマジャクシやカエルを捕まえて観察しているグループもありました。川遊び以外の遊びでは、班ごとに用意されていた文房具を使ってお絵かきしたり、折り紙をしていました。特に私の班では、可愛いシールを集めることが女の子たちの中で人気なようで、自分たちの班のシールだけでは足りないので、男の子の班からもらってくることもあったほどでした。子どもたちが活動したのは、遊びだけに限らず生活面でも見ることができました。特に食事では、食材を決められた場所に取りに行く役割をリーダーの方から伝えなくても、積極的に動いていたり、後片付けも自分のお皿はきちんと流しに戻していたり、自主的に仕事をする場面が見られました。キャンプ全体を通して、普段できない体験や遊びをしたり、決められた班で生活することで、子どもたちがひとつひとつの出来事を考え、楽しむよい機会になったと思います。
- ② リーダーの反省点としては、班で就寝するときに、班内にまだ起きて騒いでいる子どもたちと早く寝たい子どもたちがいて、早く寝たい子たちの側が寝れない状況を作ってしまったことです。注意を促して寝ようと伝えたのですが、その注意によって起きている子どもたちが興奮して逆効果になってしまいました。子供たちとの接し方についてキャンプ前から考えていましたが、改めて注意をする、伝える、伝える内容を子どもたちに聞いてもらう難しさを実感しました。
- ③ 今回のキャンプに参加して私自身が感じたことは、子どもたちが本当にキラキラ輝いているなと思いました。川遊びでカエルを見つけて喜ぶ、捕まえようと必死になる、逃げられてがっかりする——ほんのささいな場面に見えますが、そのささいな光景を逃さず、ひとつひとつに喜怒哀楽を示している子どもたちの姿を見て、ささいなことはささいなことでも済ますのではなく、立ち止まって興味を持ってみる、疑問に感じてみることを今まで諦めて逃していたのかなと思いました。子どもたちの純粋な心とこの四日間ふれあって、改めてひとつの出来事を向き合う大切さに気付きました。このことを心にとめて、これからの日常の生活でも子どもたちの視点でいろいろな物事を楽しんでみようと思います。



6. ① 青年リーダーの感想

浦上 宏太（明治大学 4 年）

1. キャンプ中に特に様子がおかしくなる子ども達は特になかった。私の班は、リーダーが 3 人いたこともあり子ども達全員を見れていたと思う。キャンプ後半になると、お手伝いを進んでやる子、言われればやる子、言っても遊ぶ気持ち強く手伝わない子等、普段の家での過ごし方がキャンプ生活に影響していることを感じた。
2. 全体的にもっとこうしたらよかった等の反省点は特にない。ただ、自分のグループの子ども達が、他のグループの子ども達と遊ぶ場面が多くあったので、その時に各リーダー達がもっと密にコミュニケーションを取ればよかったと思う。
3. キャンプ全体の感想は、大変充実していて貴重な時間を過ごすことが出来たと感じる。正直、参加前はくたくたになって疲れきった自分を想像していた。しかし、今になるとやりきったが思っていたほど疲れ切っていない自分がいる。これは決して力を出しきれなかった、体力を温存していたということではない。子ども達と全力でぶつかり、遊んだ結果、グループの子ども達と身体のリズムが合った結果だと感じている。だから、4 日間過ごしてくれた子ども達に感謝したい。また、参加前には考えなかった、また子ども達に会いたいという気持ちもある。キャンプ中のプログラムは、自由に過ごせる時間が多くあった。その点が、子ども達と寄り添う時間が多く持てることになり、キャンプを充実して過ごすことが出来たと実感出来る 1 つの要因であると感じる。キャンプ中に気になる点があった。それは、子ども達にどこまでルールを守らせるかという点である。これは、各リーダーによってグループごとの過ごし方が大きく変わる点だと感じる。私のグループは、班のリーダー達と話し合い、震災直後は自由に過ごすことが許されなかった子ども達なのだから、ルールを強制せず、怒ることはせず、どんなわがままにも応えるスタイルにしていた。そのスタイルの為、子ども達が大人になった時の為に注意しなければならない点を見逃していた場面は正直ある。他のグループを見ていると、私達と同じスタンスのグループ、逆に怒る時はしっかり怒ってあげるスタンスのグループもあったように思える。この点は、難しい点ではあるが、子ども達の充実感等にも影響してくる点であると思うので、今後キャンプを行なっていくのであれば、事前にはっきりさせておくべき点でないかと感じた。個人的に新地町と関わりがあり、今までにもいろいろな方にお会いする機会があった。ただ、子供達と 4 日間も触れ合う機会はなかなかない経験だった。その子ども達とキャンプを過ごしてみて、1 つだけ強く感じたことがある。それは、この子ども達であれば、新地町は将来に向けて前に進み続けるということだ。復興に向けて、今現在多くの大人の方達が動き、より良い方向に進めようと必死である姿も新地町を支えている素晴らしい点であることは強く感じていた。この点に加え、将来の新地町を支えていくのは、4 日間を共に過ごした子ども達の世代であり、子ども達の前に進んでいこうとする気持ちは絶対に大人の方達にも負けないものがあると感じた。最後に、このキャンプに参加してくれた子ども達、子ども達を託して下さった親の皆様、このような素敵な時間をありがとうございました。



6. ① 青年リーダーの感想

岡本育恵（明治大学 3年）

① キャンプ中の子どもたちの様子について

子どもたちは本当に元気で、予想以上の活動量にとっても驚かされました。4泊5日、休めた時間は1分もありませんでした。朝起きてから夜寝るまで、とにかくずっと何かして遊んでいて、びっくりしたのはその集中力です。1つの遊びを一度始めるともう夢中になって1時間も2時間も同じことをしていました。私たちが「キャビンに戻ろうよ」と声をかけても「んーもうちょっと!」と言ってそこからさらに1時間、といった感じでした。

気が付いたことは、コミュニケーションの取り方に男女の差があったことです。女の子はリーダー名で呼んでくれるまでに少し時間がかかりましたが、男の子は初めて話した時にすぐ名前を呼んでくれました。でも、男の子は甘えたかったり照れたりするのを隠したくてちょっと強がってる様子が可愛いなあと思いました。

② もっとこうしたらよかったなあと思うこと

とにかく細かい連絡不足でした。常にみんなが一緒に行動していたわけではなく、それぞれの子どもがやりたいことをやっていたので同じキャビンでも別行動する場面もたくさんありました。その際、今誰がどこで何をしているかという情報を常に共有していれば、もっとスムーズにいったかなと思います。というのも、私たちリーダーが気付かないうちに誰かがいなくなったり、よそのキャビンで遊んでいたり、友達とけんかしたということがあったからです。大事には至らなかったものの、もっと注意を払うべきだったと反省しています。

もう1つは役割分担です。キャビンの中でもよくお手伝いをしてくれる子どもと、自分の布団も敷かずに遊びに夢中になる子どもがいました。それを怒ることは出来なかったのですが、誰かがいつも我慢してストレスを感じる状況はやはりよくなかったと思います。最初から役割を与えたり、キャビンのルールを決めるべきだったかもしれません。

③ キャンプに参加しての感想

私にとって、子どもたちとこんなに近い距離で接する機会はほぼ初めてだったので、最初はとても緊張したし、わからないことの連続でした。「子どもと遊ぶ」ことがこんなに体力が必要で、難しいということを初めて知りました。でも子どもたちと過ごした時間は本当に充実していて楽しくてあっという間に過ぎてしまいました。最終日の朝は慌ただしくて、お別れの時もちゃんと話すことが出来なかったのが心残りです。キャンプから帰ってきてから、たまに子どもたちのことを思い出して懐かしくなったりします。今回のキャンプが子どもたちにとって夏休みの楽しい思い出になってくれれば幸いです。この貴重な機会に巡り合えたこと、関わって下さったみなさんに感謝しています。



6. ① 青年リーダーの感想

上遠野 智美（明治大学 3 年）

新地っ子の夏休みに初めて参加させてもらった。福島県新地町の小学生たちと、川遊びや、陶芸・太鼓など、沢山の経験をした。このキャンプは、子どもたちの心の中で大きな思い出としてずっと残っていきだろうし、また私にとっても、ひと夏の楽しいキャンプの思い出として、この先忘れられない思い出となった。

新地町の子どもたちは本当に明るく元気に遊んでいた。けれど就寝時に、ふと「(新地町が)津波があったから海の匂いで臭い」「仮設に暮らしているから家族みんなで寝てるんだ」などを話してくることがあった。就寝のため部屋の電気を消すと、このように震災のことを思い出してしまうのではないかと感じた。

子どもたちの変化としては、なかなか私たちリーダーに話しかけてこない子が、時間が経つにつれて、話しかけてくれたことだ。最初はとても不安そうな顔で、笑顔が無かったけれど、2日目あたりから自然と楽しんでいる様子であった。声を上げて笑っているのを見たときは、私自身、非常に嬉しかった。

私のチームは、リーダー 3 人、子どもたち 6 人の 9 人だったが、全体的に雰囲気の良いチームだったように思う。私自身、6 人の子どもと長い間ずっと一緒に過ごすという経験がなかったので、他のリーダー 2 人に助けてもらった部分が多い。体力がついていかず、休息をとることもしばしばだった。子どもたちと思いっきり遊び、向き合えたかと言われれば、まだまだな部分があったと思う。遊びの時間配分も、メリハリをつけたものにしなければならなかった、と思う。このような反省点を、また次の機会に生かしていけたらと思う。

新地っ子の夏休みに参加させてもらって、私自身も非常に楽しい思い出となり、「やってよかったな」と心から思う。最初は緊張していて、「どんな子ども達に来るのかな、馴染めるかな」というような不安が大きかった。けれどそれは余計な心配であった。子ども達が元気で明るくて、逆に元気をもらえたように思う。子どもの力は大きなものなのだなと改めて感じた。

またもう一つ。食事やその片付けなど、「自分が率先してやらなきゃ」という考えが私の中で芽生え始めたきっかけになったように思う。実家に住む私は、親に頼ることに慣れてしまっていた。けれどこのキャンプを通して、子ども達に何度も「大学生は大人～」という言葉が掛けられた。子ども達と 3 泊 4 日という時間を一緒に過ごすことで、「誰かのために動く」ということはとても大切なことなのだを改めて感じ、学ぶことができた。子ども達に感謝したい。

そして最後に、お世話になった YWCA の方々、日本子どもソーシャルワーク協会の方々、そして他のリーダー達にも心から感謝を述べたい。このような機会を作っていただき、本当にありがとうございました。



6. ① 青年リーダーの感想

川合 一輝（明治大学 4 年）

私にとって今回の「2013 年度新地っ子の夏休み」への参加は非常に刺激的な体験でした。私は、幼稚園時代からボーイスカウト活動に参加しています。ボーイスカウト活動の一環として多くのキャンプに参加しました。また、今回の行事のように運営側としてキャンプに参加した経験もあります。ボーイスカウトでのキャンプの経験から、私はキャンプに慣れていると考えていました。しかし、今回の行事に参加して、自分が体験したことのないキャンプスタイルが存在する事を知りました。「2013 年度新地っ子の夏休み」とボーイスカウトのキャンプ双方に参加した経験から、行事を運営する団体によってキャンプスタイルが大きく異なることを実感しました。特に大きく異なっていると感じた点は、参加者である子どもに対する接し方です。ボーイスカウトのキャンプは班単位で活動を行います。班は子どもたちのみで構成されており、班員には班長や次長、料理担当、記録担当といった役割が割り振られています。班の活動は班長を中心として進められます。成人指導者はあまり積極的に班内での活動に干渉しません。なので、子どもたち自身で設営や炊事、掃除等の作業を行わなくてはなりません。子どもたち自身で日々の作業を実行するので、リーダーシップや協調性、自立心等を鍛える事が出来ると思います。ボーイスカウトのキャンプは子どもたちを鍛える事に主眼を置いて実行しているように思います。しかし、今回の行事の趣旨は子どもたちを鍛える事ではありません。私自身もボーイスカウト形式のキャンプに慣れていたため、前半は戸惑いました。「2013 年度新地っ子の夏休み」では、成人スタッフと子どもたちが一緒に生活をします。炊事、掃除等の日々の作業も成人スタッフと子どもたちが協力して実行します。そのため、積極的に協力する子とそうでない子が存在します。前半は積極的に協力してくれる子が少なかったです。しかし、キャンプ生活に慣れてくると、子どもたちの中で自然に役割分担が行われ、自発的に協力してくれるようになりました。また、成人スタッフと一緒に、学校や学年が異なるメンバーと生活する事は子どもたちにとって非日常的な体験であったと思います。今回の行事では子どもたちに特定の役割を割り振りませんでした。その結果、時間と体力的に余裕があるので遊ぶ時間が増え、キャンプ生活をより楽しむ事が出来たと思います。また、役割が指定されていないので、自分が得意な役割を自発的に発見し手伝うことが出来たと考えます。「2013 年度新地っ子の夏休み」でのキャンプスタイルは、子どもが自由に行動できる時間を確保するとともに、自己判断でお手伝いに協力できるスタイルであったと思います。また、子どもが非日常的な環境で多様な人と交流する事が可能でした。そのため、「2013 年度新地っ子の夏休み」に参加した子どもたちは、リラックスした状態でキャンプを楽しむと同時に、自主性を育むことが出来たと考えます。私自身も、今まで経験したことがないスタイルでのキャンプだったので、非常によい経験となりました。今回の経験を活用して今後の活動に取り組んでいきたいと考えています。貴重な体験に参加させていただきありがとうございました。



6. ① 青年リーダーの感想

下田 明莉（明治大学3年）

① キャンプ中の子どもたちの変化について

最初は子どもたち同士も、違う小学校から来ていることもあり、知らない者同士で皆静かだったのですが、すぐに打ち解けて、みんなで一緒に仲良く元気に遊ぶことが出来ました。キャビンでは特に、4年生が率先して、夕食のお米を研いだり、皿洗いをしたりたくさんお手伝いをしてくれました。それを見た3年生の子どもも、後日から時々お手伝いをしてくれるようになりました。川遊びでは、数分前まで元気に騒いでいた子が、体が冷えてしまって「寒い」と言っていたりと、体調の変化が急で、特に注意していました。

② もっとこうしたらよかったなあと思うこと

班の中に6年生の子が一人だけいたのですが、もう少し6年生の子に合った遊び方や、他のキャビンの6年生も誘って遊んだりすることなどを考えてあげればよかったと少し後悔しています。というのは、キャンプ中に他のキャビンのリーダーと話す機会があった時に、それぞれのキャビンの6年生の様子について話しました。私のキャビンの6年生だけでなく、他のキャビンの6年生の子どもも、他の3・4年生の子たちの遊びに入りきれない様子だという事を聞きました。時々外で遊んでいる時に、隣のキャビンの6年生の子と会う機会があった時には、とびっきりの笑顔で走り回って、遊んでいました。

③ キャンプに参加しての感想

私は、今回このキャンプに参加させて頂けて、本当に良かったです。最初は、子どもたちが一緒に遊んでくれなかったらどうしよう、キャンプ中ちゃんと子どもたちの保護者になれるだろうかと不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、実際子どもたちが来てみると、みんなリーダーのあだ名で呼んでくれたり、新しいかわいいあだ名をつけてくれたり、子どもたちの方からもどんどん話しかけてくれました。子どもたちも、同じキャビンのお友達のみならず、他のキャビンの子にもお菓子を分けてあげたり、本当に優しい子ばかりでした。キャビンでは、折り紙で名刺作りをして、配り合ったりと子供たちに新しい遊び方を教えてもらいました。川では、特に注意して子どもたちを監視しました。私達大人でさえも自由に身動きが取れなかったのが、子どもたちが本当に心配でした。しかし、生き物を見つけたり、石を集めたりとそれぞれ自分の興味に合った遊び方が出来て、子どもたちも本当に楽しそうでした。私も一緒に川に入って遊んで本当に楽しかったです。同じキャビンのリーダー同士でも、たくさんコミュニケーションを取り、子どもたちの様子について情報を共有し合い、子どもたちにとっても、私たちにとっても、安心するいい環境をつくれたと思います。今回のキャンプは、私も今まで経験をしたことがないことをたくさん経験することが出来ました。本当に濃い思い出を作ることが出来ました。また機会があれば、参加させて頂きたいです。



6. ① 青年リーダーの感想

鈴木 慧（明治大学 1 年）

4 日間のキャンプを通して、子ども達は普段とは違った環境でのびのびと遊ぶことができたのではないかと思います。遊ぶときは常に全力であり、その中で、見せる笑顔が何よりの証だと思います。子ども達と自分達のどちらが遊んでいるとも分からないくらい、一緒になって全力で遊べたのは、子ども達が自分達の事を信頼してくれているからだろうと思いました。また、子ども達は誰に言われるともなく、自分達からお手伝いをしてくれるようになりました。食事の準備その後の後片付けに特にその姿が見られました。自分達から進んで動いてくれる姿を見ていてすごく頼もしさを感じました。

キャンプ中のこうしたよかった点については、子ども達はすごく元気だったので、正直彼らのパワーに圧倒され、自分がまいてしまい、余裕がなくなってしまうことがありました。なので、そのような時には他のリーダーを頼ったりすることができれば、もっと余裕を持ってできたのではないかと思います。

普段の生活で子どもと接する機会がないので、どう接していけばいいのか分からず、不安でした。しかし、子ども達が全力で自分に接してくるので、自分も全力で接していく内に、当初の不安は消えていきました。子ども達と寝食をともにし、一緒にくたくたになるまで遊び、楽しんだ 4 日間は自分にとってすごく貴重なものとなりました。子ども達から素直さを学びました。最終日に楽しかったと、子ども達に言われたときは、すごく嬉しかったです。4 日間頑張ったよかったなと心の底から思えたと同時に、別れなければいけないと思うと、すごく寂しさがこみ上げてきました。また、機会があれば新地の子ども達に会いたいなと思いました。また、このような機会があれば参加したいなとも思いました。そして、最初はあまり馴染めていなかった他のリーダーの方とも打ち解けることができよかったです。子ども達がこの 4 日間のキャンプを夏休みの思い出としてくれると幸いです。ありがとうございました。



6. ① 青年リーダーの感想

佐々木龍樹（日本子どもソーシャルワーク協会／武蔵大学 3 年）

- ① 初日は初対面ということでリーダーとの接し方も手探り状態だった。私のグループにおいては過去に参加経験のある子どもが多くリーダーに慣れている様子が見受けられた。ただグループの中には小 3、小 4 といった低学年で初参加の子もいて少し不安な面持ちだった。しかしそれは着いてすぐの川遊びをしたことで払拭された様子であった。キャンプは初めてといった低学年の子は最初恐る恐る川に入って行ったが手をつないで一緒に入ることにより川遊びを満喫するようになっていった。子どもたちは初日からとても元気でリーダーの声もなかなか通らないといった状態であった。しかし、その様子からキャンプをととても楽しみにしていることが見て取れて、こちらも精一杯頑張らないと逆に元気づけられてしまった。子どもたちは人懐っこく初日からリーダーに積極的に関わろうとしてくれたおかげでこちらもすぐにグループになじむことができた。低学年の子はおんぶや肩車をねだったりと甘えてくることが多く 1 日に 10 回以上肩車やおんぶをして歩いた。高学年の子は自分のやりたいことを考えて行動していた。日が進むにつれキャンプの生活に慣れたことでリーダーに対して積極的にコミュニケーションも増えてはしゃぎすぎて夜までボードゲームで遊んでいたりと、リーダーにやんちゃする場面もあった。
- ② 肩車で疲れてしまい、子どもたちの要望に応じてあげられないこともありもう少し頑張れたと終わってから思った。また、キャンプ中子ども同士でケンカする場面があり、様子を見てから止めていたがもう少し早く止めていればよかったと思う。
- ③ このキャンプに参加して子どもに対する関心が増えたと思う。子どもに関して漠然とした考えを持っていたが子どもに接することで子どものことを浅く考えているかがこの合宿を通して実感した。子どもは周りの大人の反応に機敏であり態度を気にしている。子どもは観察力があり大人の些細な態度もしっかり見ていることが話していて見て取れた。もちろん純粹に思いのままに行動する姿は可愛いと思う。ただこのキャンプでは子どもらしい面と大人びた面の両方を見せられ子どもは接して見ないとわからないと思った。今回のキャンプはよい経験であり自分の価値観を変えさせてくれるものとなった。



6. ① 青年リーダーの感想

谷口 智美（明治大学 4 年）

新地町子どもたちと合流してからの4日間のキャンプ。正直に言うと始めはちょっと長いかな…なんて思っていました。でも、実際には子どもたちのパワーに圧倒されている間にあっという間に終わってしまいました。今回は各キャビン4～6人の子どもたちと、リーダー2,3人での生活という初めての試みとのことでしたが、初日はみんなで一緒にキャビンで過ごしていても、子どもたちは元々知っている（同じ小学校や児童クラブ）友達とばかり話している、という状況でした。食事のときもなかなか全員で盛り上がることができず、少しこの先が心配にもなりました。ですがそんな心配をよそに、時間が経つにつれていつの間にか今回初めて会った子同士の会話が見られるようになり、気付いたらキャビン全員で毎日楽しく笑うことができていました。また、一緒に過ごしていく中で子どもたちの口から震災の話を耳にすることは、わたしはありませんでした。そのことが子どもたちの心で震災がどのようなものになっているのかを示すのか、わたしにはわかりませんが、他のキャビンでは震災のことを話す子もいたようなので子どもたち一人一人がそれぞれの形で受け止め始めているのかな、と感じました。ただ、食事の時間に感じたことなのですが、体の大きさの割には少食な子が多く、放射能の影響から屋外で思うように遊べていないことが関係しているのではないかと感じました。

そして、今回D4キャビンのリーダーを任せていただき、毎晩のリーダー会に参加することができて本当によかったと思っています。各キャビンで過ごしているとどうしても、自分のキャビンの子どもたち以外とは接する機会が少なくなってしまうので、各リーダーから子どもたち一人一人の様子を教えてもらうことができたことは有難いことでした。また、リーダー一人一人が真剣に子どもたちに向き合っているのだということを実感できた時間でもありました。ただ、そのリーダー会で出た反省を、他のリーダーと共有することがなかなか難しかったです。できれば子どもたちの居ないところで…と思いつつも子どもたちと離れている時間はほぼないに等しく、他のD4のリーダーに伝えられることができなかったことを反省しています。

また、リーダー会の時にも出た話なのですが、キャンプに出発する前に「今回のキャンプで子どもたちにどこまでを求めるのか」ということをしっかりリーダー全員で共有することができていれば、さらに良いキャンプになったのではないかと思います。子どもたちの自主性を大切にしながら、自分のことはすべて自分でやる、というところまで求めるのか、それとともにかく自然の中で思う存分遊んでもらい、わたしたちリーダーはそのサポートに徹するのか、この部分の認識が各リーダーで違い苦労した部分もあったようなので、もし次回があるのならば、「キャンプの目的」を全員で共有できたらいいのではないかと思います。今回のキャンプで、少しでも子どもたちの大切な思い出になれるように、という思いで5日間過ごしましたが、結果としてわたしにとっても一生忘れることのできない思い出になりました。このような機会をくださったスタッフの皆さんに感謝します。



6. ① 青年リーダーの感想

千田 陽平（日本子どもソーシャルワーク協会）

① キャンプ中の子どもたちの様子について（気づいたこと、感じたこと、変化など）

キャンプ中、子ども達は「我慢」に対する発散をしていた。数日間過ごした子ども達の言動から、このキャンプにおける彼らを動かすエネルギーの多くの部分が普段の生活や人間関係での「我慢」に対する発散であったように私は感じとれた。彼らは日常、恐らくだが、家庭内であれ程までにわがままを言わないだろうし、学校内でもキャンプ中で行なった程、自らの要求をしないだろう。閉校式で彼らが見せた親の前でのおとなしさを見るに当たり、キャンプ中における何かをぶつけるような彼らの言動の数々に合点がいった気がした。自然やキャンプそのものを楽しむより、家庭や学校、被災地の子どもである現実から離れ、非日常空間で、普段言えない事、普段は許されない行動を期間中は許されたという点で、彼らにとってはストレス（我慢）の発散になり得、よかったのだと感じる。注意の多い、彼らにとっては小言の多い、母親（または担任教師）を連想させるシニアリーダーが夕食に帯同した際、彼らは水を打ったように静かにおとなしくなった。閉校式での彼らを見た際、あの夕食時の、場の空気を不満足に感じ窮屈に押し黙る姿が、彼らにとっての日常、我慢の姿の一端なのだと知ることができた。（その夕食の後、それに近い感想を子どもからも告げられた。）他のパターンで、私の班に聞き分けがよく、お兄ちゃん然とした6年生の男の子が一人居た。同じ班内には、学年相当より幼い男の子が二人居り、6年生の彼は当初、自由奔放で強烈にわがままなその二人の言動を見るにつけ、「何であんなに子どもなんだ」と不満を口にし、自身の行いを崩そうとはしなかった。だが、時間とともに彼も徐々に子どもとしての顔を見せ始め、最終日の夜にはその幼い二人と三人で夜遅く最後まで語り合っていた。その一連の変化がとても印象に残る。彼が「良い子」「良いお兄ちゃん」でなければならぬ我慢を解き放ち、ただの彼自身である、本来の瑞々しい子どもの姿になっていった時、心よりよかったと感じた。彼と彼の変化は今でも私の心のなかに息づいていると感じている。

② もっとこうしたらよかったなと思うこと（自分の役割に対する動き）

今思えば、彼らの我慢の発散をもっとギリギリまで容認してもよかったのかなと思う。強く人に迷惑をかけたり、安全や集団行動としてどうしても不利益になる時は言わざるを得ない場合もあったが、班内のリーダー同士で方針をもう少し早めに確認しあっていたら（班長は、とことん子どもの自由を望む方針だった。二日目深夜に遅れて知った。もっと早めに話をきいていけば…）、『大人の都合』により子どもの欲望欲求を抑え込まなくても良い場面があったと後悔される。キャンプ中終始、なぜ自販機でジュースを買ってはいけないのかを何度も何度も問うてくる子どもがいた。その子に対して「キマリだから」としか、大人の嘘で返せないくらいだったら、密かに一緒に買いに行っていればよかった。誰のためのキャンプだったのか。思い出すと今でも後悔をする。キマリを破って内緒でリーダーとジュースを買う。そういう「秘密の経験」も夏のキャンプにはあってよかったのかもしれない。蒸し暑い中、あれだけ動いてあれだけ汗をかいて、ぬるい麦茶が常温の水道水で抑えこむのは、私自身が大人としての日常に縛られた結果だった。

③ キャンプに参加しての感想（自分が感じたこと、変わったことなど）

- ・「学年や本来の年齢より幼い子」は確実に存在するというのを、同学年と比較して確認できたのはよかった。
- ・小4～小6年生が抱える「我慢」を集合体として感じ得たことがよかった。
- ・全員とは行かなかったが、他班の子も含め、心が通じ合えたと感じた。子ども達の純真さに感動した。

「幼い子」が集団の中でどう行動するか、周りはどう反応するか、そして結果的に「普通の子たち」の集団からどのように弾かれていくのか、短い期間内での経過を目の当たりに出来た。彼らの中に生じる“ギャップ”や、「幼い子」がそのギャップに直面し、集団の中での孤独、ズレ、人とは違う何かを直観的に感じて、状況を打開する（欲求を満たす）ため彼らなりにとる行動が、更に集団からの孤立を招く結果となってしまいう一連の流れを客観的に見ることができた。今後活かせるケースだった。多かれ少なかれ、このようなケースに准じて、「我慢」を発散できる子、さらなる我慢を溜めざるを得ない子が振り分けられていくであろう過程を、比較実態像として感じ得た経験は貴重だった。



6. ① 青年リーダーの感想

徳留 有香（日本子どもソーシャルワーク協会／専修大学 3年）

「子どもたちは本当に元気だ」この4日間で痛感したことです。普段子どもと関わる機会はあるものの4日間よくこんな元気が続くな、「大人が子どもと同じ動きをしたら生きられない」というのもあながち嘘ではないのかもしれないと思わされました。

行きのバスでは大人しくしていた子どもが走り回ってリーダーに対しての口調も少しずつ子どもに対するものと似ていく。最初は緊張し、遠慮していた子どもが身の回りのことに不満を漏らします。その時ある悩み事を相談してくれる。時間と共にだんだんと子どもたちとリーダーたちで自然な「輪」が作り上げられたという感覚が嬉しく、何点か反省点はありますが4日間を楽しく過ごせたと思っています。

キャンプが始まる前までは、私は被災地の子どもを意識せずのびのびと楽しんでくれればいいと考えていました。細かいスケジュールがなかったことで子どもたちはのびのびと遊ぶことが出来ました。しかし一方で、直前のリーダー会で遊びの時間（川遊び）が知らされることでおおまかなスケジュール管理、そしてリーダーの体力管理が難しくなりました。もちろん主役は子どもなのでリーダーは休むことに対し遠慮がちになります。リーダー間でのコミュニケーションまた情報共有についても難しく感じられました。私も最初はリーダーに対し注意をすることが出来ず、イライラしてしまうこともありました。また同じロッジのリーダーだけでなく他の班のリーダーと積極的に協力することが必要だったように感じましたが、キャンプが始まってしまえば難しいので打ち合わせや前年の反省という部分をもっと事前ミーティングで充実させることでスムーズにいくのではないかと思います。

私自身リーダーとしてもキャンプ全体としても改善できることはあると思いますが、何より枠組みのないキャンプ、「ダメ」のない雰囲気は本当に素晴らしかったと思っています。この雰囲気は子どもを自然体にして、わがままで子どもらしい姿になれたキャンプだったのではないのでしょうか。同じ町の違う小学校の子どもが混ざり合って夜まではしゃぎ合う。子どもって本当に沢山パワーを持っています。他のリーダーが言っていました、「キャンプの終了式のとき、みんないっせいに静かになった。キャンプのときはあんなにうるさかったのに。やっぱりため込んでいたんだなあ。」私はその時気付きませんでした、本当にそうだと思います。もしも、子どもたちがその気持ちを少しでも外に出すことがこのキャンプを通じて出来たなら、私は嬉しいです。参加するチャンスをくれたスタッフの方々、一緒に過ごした子供たち、リーダー、本当に素敵な4日間をありがとうございました。



6. ① 青年リーダーの感想

仲澤 彩亜（明治大学 3 年）

今回、初めて新地っ子の夏休みにリーダーとして参加させて頂いた。最初は子どもたちと馴染めるかどうか不安であり、また、子どもたちも同じように不安だったようで、口数の少ない子もいた。事前に家族構成や家庭事情を聞いていたが、私個人としてそちらに気を遣いながらというのはとても難しく、とにかく子どもたちが楽しめるようにと努力した。すぐに打ち解けてずっと笑顔な子もいれば、しばらく経ってもおとなしく、「楽しくないのかな?」と不安になる子もいた。グループで唯一の 6 年生の子はとてもしっかりしていて明るく、お手伝いやみんなの遊び相手になってあげたりと、とても私達の助けになってくれた。しかし 3 日目程に「(学年が下の子と遊ぶのが) 楽しくない、帰りたい」と漏らしたのを聞いてとても反省した。小学生として一括りにしてしまうのは問題で、3 年生には 3 年生の、6 年生には 6 年生の相応しい遊びというのがあるのだということをもっと考慮すべきだと感じた。また、やはりこういう場合に 6 年生ひとり孤立してしまう可能性がある為、他のグループとの交流がもっとあればと思う。現在も仮設住宅で暮らしている子は、しばらく大人しかった子の一人だった。

その子は真面目で、お手伝いも頑張ってくれたのだが周囲に気を遣いすぎているように感じた。その為こちらから積極的に声を掛けたり、遊んできていいよ、と促すことにした。その結果、最終日近くになると自らすすんで遊びに参加するようになり、また、私達に甘えてきてくれるようになったのが嬉しかった。震災から突然変わった環境に、自分がしっかりしないといけないのだと、気を張っていたのかもしれない。その子は少しずつ家族の事や仮設住宅の事も話してくれた。

食事中に突然震災の話題が出たりすることがあったが、それ以外は全く普通の子どもたちの会話だった。私自身も当時の事をあまり深く訊く術を持っていなかったので、子どもたちが時々みずから話してくれる事を聴くことだけに専念した。反省点としてはそこで、完全な受け身ではなく、少しでも当時の事を話し易いような雰囲気を作ればと思った。もちろんこのキャンプの主目的は子どもたちが楽しめる環境作りであり、無理に思い出させて暗い思いをさせるべきではない。しかし 2 人きりでじっくり話す機会をもっと持つべきだったと思う。

このキャンプを通して私自身子どもたちからたくさんのパワーを貰った。このパワーは今後の復興に向けて不可欠なものだと感じたし、子どもたちの笑顔を絶やさない為にもっとできることがあれば、進んでおこなっていきたいと思う。



6. ① 青年リーダーの感想

中野 亜矢子（明治大学 3年）

今回、新地っ子の夏休みに参加させていただいて、様々な子どもたちと楽しい思い出を作るとともに、被災地という環境の中で、複雑な家庭事情の中で暮らす子どもたちがふとしたときに内面を見せてくれたことが非常に印象的であった。キャンプ場に着いた当初から活発な子は名前も知らないであろう私を始めとするリーダーにじゃれついており、最初は控えめだった子どもたちも時間が経ちリーダーや班員と馴染むにつれ見る見るうちに打ち解けていった。仲良くなるにつれ暴言や軽い暴力も目立ってきたが、言い返されることや反撃を期待しているような雰囲気もあり、これが彼らなりの遊び方でコミュニケーションの取り方なのかと感じるようになった。もちろんその中で手が付けられないほどのものもあったし、遊びが行き過ぎた危険行為（川遊びの際、人がいるところに石を投げる等）もあったが、本当にやってはいけないことについては唇をとがらせながらも耳を傾ける素直さを持ち合わせていた。複数人のなかではやんちゃで賑やかな子も、一対一や少人数でのんびり話をすると、普段の生活の様子や将来の夢、自分の好きなことなどを吐露し、その様子もずっと大人びて落ち着いていた。最終日の夜、同じ班だったM君は、なめさんがバーベキューで使い切らなかった薪を燃やす様子をそばでじっと見ていたらしく、大浴場からロッジへ戻る私を見つけて呼び止めてくれた。一緒に炎を見ながら話すと「ぼくは将来科学者になるのが夢なんだ。炎を美しく見せる発明をしたり、津波や地震のときに役立つ発明をするんだ。そのために学校の勉強もがんばってる」ときらきらとした目で話した。D-2 グループのY君やH君もロッジで話すうちに打ち解け、最終日は「また新地に来いよな」と別れを惜しんでくれるほどであった。一緒に食卓を囲みたくたになるまで遊ぶにつれて、初日よりずっと砕けた表情を見ることが出来た。余談だが、いつもは「女子は～」と少々悪態をついていたにも関わらず、最終日の夜にM君やK君がD-4の女子部屋まできて「やこ！最後の夜なんだと思ってんだよ！早くD-1に戻ってこいよ！」と呼びに来てくれたことがなんとも可愛らしく、今でも思い出すと頬が緩む。

キャンプ中は、あくまで自分の班を優先に見なければと思い、じゃれついてくる他班の子どもたちへの反応が疎かになっていたように思う。自分の班以外にも子どもたちはいて、その子たちにも忘れられないくらい素敵な思い出を残したいと思うのなら、「他班だから」と扱いを雑にするのは間違いだったのでと思う。また、最終日に近づき疲れてくると部屋遊びに終始する子どもも多くなり、水鉄砲で遊びたい子や外に出たい子の希望を上手く汲み取れ切れていなかったのも、この点も反省したい。また、夜はD-4の女子部屋に泊まりに行っており、夜中に何度も出入りするのD-4の女の子たちも悪いと思い、早めに就寝するようにしていたが、最終日くらいは自分の班のロッジで夜更かしに付き合っても良かったと思う。子どもたちにとって、夜更かしというのはきつとひとつの魅力的な響きを持っていただろうし、実際「最後の夜くらいこっちの部屋に泊まってもいいじゃん」と駄々もこねられていたので、彼らとずっと夜の時間を共有するべきだったと感じた。

今回のキャンプの方針として「子どもたちを叱ったり怒ったりするのではなく、なるべく受け止める」ことがあったが、最初は受け止めるといっても何をしたらいいかわからず、カウンセラーでもなく特別な知識もない私に何ができるのだろうと思うこともあった。だからこそ、私ができるのは力いっぱい子どもと遊ぶことしかないと、初日の川遊びでは服の襟元を青く染めるまでの結果に至った。振り返ると、男の子たちと打ち解けられたきっかけはあの川遊びにあったと思う。遊びながら自分も十分に楽しいと感じなければ、子どもたちにも色濃く楽しい思い出は作れないと考えて途中からは、叩かれれば痛いと言い返したりくすぐりや追いかけ返すなどでやり返し、暴言を吐かれれば選ぶ言葉には気を付けながらも言い返すようにした。リーダーとして言葉を発するよりも、遊び仲間としての言動を選ぶようにし、最後辺りは自分でも「リーダーとしてよりも、やこというメンバーとして記憶に残りたい」と思うようになった。3泊4日のキャンプはあっという間に過ぎ、どの日も遊び疲れたという感想に尽きる。彼らにとっても今回の新地っ子の夏休みがかけがえのない夏の思い出になり、大きくなってからも口元を緩ませてくれる楽しいキャンプになってくれれば幸いだ。



6. ① 青年リーダーの感想

波多野 葉子（日本子どもソーシャルワーク協会／慶應義塾大学 4 年）

1. キャンプ中の子どもたちの様子について（気づいたこと、感じたこと、変化など）

キャンプ中の子どもたちは驚くほど元気で、4 日間の中で変わっていく様子が本当に見ていて素晴らしいと思った。最初はなかなか周りの子どもと話せなかったり、班の中でばかり遊んでいたりした子ども達が、自分から話しかけるようになったり、笑顔が増えたり、他の班の子ども達と楽しそうに遊んでいたりと、そのように変わっていく姿を見ることができてとても嬉しかった。学校も学年も違う子ども達が、一緒に楽しく遊ぶことができること、自分達で遊びを考えて自分達でキャンプを楽しむものにできること、きちんとお互いを思いやることができること…。キャンプの中では子ども達の素敵などころをたくさん見ることができたと思う。

2. もっとこうしたらよかったなあと思うこと（自分の役割に対する動き）

私自身についてはもう少し余裕を持てたらよかったと思う。目の前の子どもに対応することとにかく必死で、それ以外のことが疎かになってしまった。もう少し全体を見て、時間を守ったり、やるべきことをうまくできたり、子どもへの対応の仕方をキャンプの中でいろいろ考えることもできたのではないと思う。また、そのためにも、限られた時間しかない中で、どうすればもっと 1 人 1 人と向き合えたのかなとか、こういう時はどういう方針で対応すればよかったのかなとか、そういうことをもっと周りのリーダーに相談してもよかったのではないと思う。もちろん、特に同じ班のリーダーには助けってもらってばかりだったが、私自身余裕がなく、もっと話を聴いてあげたかったな、とか、ちゃんと楽しんでもらえたかな、と思うところがあるので、もう少し連携できていればそういうところをキャンプの中で改善できたかもしれないと思う。

3. キャンプに参加しての感想（自分が感じたこと、変わったことなど）

このキャンプに参加したことは、私の中で貴重な経験となった。様々な子ども達やリーダーに出会えたことで、「受けとめる」とはどういうことなのかを改めて考えるきっかけになったように思う。私自身はまだ子どもの言うことを聴いてあげることしかできていない。でも、子どもの気持ちをきちんと受けとめる中でも子どもの成長を促すような接し方もできるかもしれないし、何でも言うことを聴いてあげるだけというのは違うのではないと思う。何が正解かは、もちろんどういう目的で子どもと関わるのかにもよると思うし、まだ私の中ではわからない。一生わからないままかもしれないが、今回他のリーダーを見ていいなと思ったものを取り入れながら、また自分なりに「受けとめる」方法を考えていけたらいいと思う。このキャンプは子ども達も多く、始まる前は不安もあった。しかし、元気な子ども達のおかげで、子ども達に元気になってもらうはずが逆に元気をもらい、最後まで楽しく過ごすことができた。私自身も子ども達に何か少しでも返すことができていたらいいなあと思う。



6. ① 青年リーダーの感想

平澤 健太郎（日本子どもソーシャルワーク協会／武蔵大学 3 年）

「気づけば最終日」

まず、今回のキャンプは楽しく、とても有意義なものになったと感じました。子どもたちと一緒に家事や遊ぶことができたので良い関係で過ごすことができたと思います。

① 子どもたちの様子

全体を通して子どもたちは元気で活発な子でした。個人差はありますが、とにかく元気で、最初のバスの中では座ったまま格闘をされていて叩かれました。元気があり、これからのキャンプを楽しみにしている様子でした。でも、私の班全員が最初から馴染めたわけではありませんでした。最初会った時から、物静かで、バスの中でも窓の外を眺めている子がいました。おそらく、学年が違ったり学校が違ったりして、どう関わっていけばよいのか分からなかったのでしょう。だけど、初日にみんなで外で昼食を食べたり、遊んだりして夜には少しずつみんなの輪に入って行きました。キャンプの終わりまでには冗談を言えるようになっていたので、よかったです。

次に、生活面に関してはみんな家事に協力的でした。ご飯の準備もみんなで分担して用意したので、私たちのグループはいつも早く準備ができました。食事では、それぞれ好き嫌いや少食の子が見られました。私としてはもう少し食べて成長してもらいたいと感じました。その他の作業もみんな協力して進めていたので、その分お風呂の時間が長くてきたり、ロッジで遊ぶ時間が増えたりしたので、子どもが楽しみにしている時間を長く確保できたと思います。

② リーダーとして振り返って

私たちリーダーとしては、私たちの班は上手く行っていたと思います。班にはもう一人リーダーがいたので、連携を取ってそれぞれ子どもたちと関わられたと思います。時には他のリーダーとも連携を取って、子どもの対応ができたので子どもの生活に不十分な点は私たちのところには見られなかったと思います。しかし、1つ悩んだことがあります。それは、初日に子どもが遊んでいる最中に喧嘩をしてしまったことです。同じ学年だけど違う学校の子だったので、解決に難しい部分がありました。今回は、子どもから謝っていたのでその場で解決はさせました。私は子どもの喧嘩は悪いことではないと思っています。自分の感情に従って思っていることを相手にぶつけることができる機会だと思います。今回、本当はもう少し子どもたちに任せて解決しようと思ったのですが、子どもたちの論点がずれていたのと、子どもたちだけでは解決できそうになかったのが、こちらが介入することにしました。ですが、当人のぶつけられなかった本音があるのではないかと心配でした。結果的に、そのあと仲よく遊んでいたのが今回の対応は間違っていなかったと思います。その他では、もっと子どもが寝るまで起きていられればよかったです。子どもたちは、初日と最終日にそれぞれ深夜 2 時過ぎまで起きていたのですが、私は子どもたちが寝る 15 分～30 分前に寝てしまったので、悔しかったです。子どもたちが寝る最後まで様子を見ていたかったです。

③ 感想

最後に、私自身このキャンプを通して感じたことは、いろいろとよい体験をすることができたという事です。子どもの年齢や育った環境が異なる中で、子どもたちの生活の様子を知ることができたのは良かったと思いますし、子どもにどのように接すればいいのか、いろいろ試せたので自分にとって貴重な体験でした。自分がどのように行動や指示すれば子どもたちは安全に過ごせるのかが分かったので、これからの活動に活かしていきたいです。今回、特別意識しないで、子どもに全力で接しました。その分子どもたちも楽しそうにしてくれたので私自身もうれしく感じています。



6. ① 青年リーダーの感想

松本 知里（明治大学 3年）

① キャンプ中の子どもたちの様子について

初日に初めて会ったときはまだ緊張していたのか、なかなか喋ってもらえず、私たちが質問してそれに答えてもらうという感じだった。しかし、数時間で打ち解けてくれる子が大半だった。一日経ち、ようやく打ち解けた子もいた。だんだんと一人一人の性格がわかってきて、子ども同士も仲良くなっていった。みんな体力がすごくあり、昼間ずっと遊んでいても夜なかなか寝なかった。食事の支度や後片付けは、言えばやるが、自分たちからやることは少なかったように思う。徐々に私たちに心を開いてくれ、安心して、頼ってくれているように感じた。

② もっとこうしたらよかったと思うこと

普段子どもたちと接する機会がほとんどないため、どのように接したらいいのかかわからず、戸惑うことも多かった。反省点は大きく2つあり、1つ目はなかなか言うことを聞いてくれなかったり私が嫌だなど思うことを子どもたちにされると、むきになって怒ってしまいそうになったことである。子どもに対してどう接すればいいのか戸惑ったところの一つである。2つ目は、次やることや時間などをちゃんと記憶できてなく、一日の流れを把握できていない時があったことである。子どもたちに気を取られ過ぎて、他のリーダーに頼ってしまったり、自分の役割をしっかりと果たせていなかったのではないと思う。

③ キャンプに参加しての感想

今回このキャンプに参加させていただき、とても貴重な体験ができたと思う。家族や親戚に年下の子もいないし、子どもと接することがほぼないため、はじめは不安もあった。接し方や、大切なお子さんを預かるわけだから安全に過ごさなくていけないなど、私もまだまだ未熟だからわからないことも多かった。手探り状態だった部分もある。私は体力があるほうではないから、常に子どもたちのことを考え一緒に遊んでいると、疲れてしまうことも多かった。しかし、私自身楽しむこともできた。たくさんのことを学ぶこともできた。本当に親の大変さを実感する毎日であった。改めて親の偉大さを知り、親に対する感謝の気持ちを持つことができた。このキャンプで感じたこと、学んだことを今後に繋げていきたいと思う。このキャンプに参加できてよかった。



6. ① 青年リーダーの感想

森屋 隆紀（明治大学 3年）

子どもたちはみんな無邪気でパワフルだった。日中、目いっぱい遊んでもまだまだ遊び足りず、夜になってもにぎやかに過ごした。私も疲れきるほどに彼らと遊びつくした。

新地の子どもたちは班ごとに分けられ、私はもう一人のリーダーとともに4人の子どもとともに生活をする、H班のリーダーとしてこの「新地っ子の夏休み」へ参加した。子どもたちは初めて会った瞬間から、「お前か、ヤモリっていうヤツは」と何の躊躇もなく踏み込んできた（「ヤモリ」というのは子どもが覚えやすい私のリーダーネーム）。しかし、いきなり話すのが苦手な子もいて「一筋縄には行かないな」と思ったのが初日の正直な気持ちだ。

木の家キャンプ場はきれいな川が流れ、もちろん子どもたちは川遊びを楽しみにしていた。天気も良く、絶好の川遊び日和だった。子どもたちは川遊びが珍しいようでとてもはしゃいでいたが、川は危険が潜んでいるから気を付けるように呼びかけると、素直に話を聞いてくれた。私は田舎育ちで小さいころから夏は川で遊んでいたため、「川遊びの仕方」をいくつか教えた。キャンプ中、数回川遊びをする機会があったが、飽きずにずっと遊んでくれていて私もうれしかった。

個人的に私は大きいボードゲームを持ち込み、子どもたちはとても喜んでくれた。日が暮れた後や、天気の悪い日はこのボードゲームやランプで遊んだ。子どもたちはとても気に入ったらしく、「ほかの班にはわたしたくない」と主張していたが、「俺はみんなに遊んでもらいたいから持ってきたんだよ」と伝えと、今度は自分から他の班の友達に貸すまでになってくれた。私は一刻でも早く遊びたい子どもたちに、言って聞かせるのに苦労したが、しっかりと伝えたいことを丁寧に伝えれば素直に聞いてくれるということを学んだ。

ご飯を炊く、料理を盛り付ける、片付けて食器を洗う、布団をたたむなど、子どもたちはこの面倒なことをしている暇があったら遊びたかっただろう。しかし、H班はよく協力して終わらせ、メリハリのある生活をする事ができたと思う。最終日前日に全班合同でバーベキューを行ったが、その時には集合も片づけも競うようにテキパキとこなし、おかげでキャンプの最後の夜はとても楽しく過ごすことができた。

初日こそ子どもの間でトラブルがあったり、コミュニケーションがうまく取れなかったりと、そこそこ問題があったのだが、このようなキャンプを過ごしていく中でいつの間にか心配の一切いらない関係を築き上げていた。「子どもはすごいなあ」漠然とこう思っていたら、もう残された時間もわずかになってしまっていた。「僕、キャンプに来てよかった。来年も絶対来るから、ヤモリも来いよな。」新地の子どもは素直に気持ちを伝えることができ、真っ直ぐに投げかけられたそんな言葉に、「おう。お前がいい子で来てくれるんだったら来るよ。」と、少々「大人」な対応をしてしまったことを若干後悔している。今回は新地の子どもたちに楽しんでもらうために自分たちが一緒になって遊んであげる、といった趣旨の中、それ以上に私は学ぶことが多かった。来年はいろいろ教えてくれた子どもたちに、私もこれまでに覚えていろんな遊びを教えて楽しく過ごせたらいいと思う。



6. ① チーフリーダーの感想

齊藤 崇（日本子どもソーシャルワーク協会）

① キャンプ中の子どもたちの様子について（気づいたこと、感じたこと、変化など）

昨年、一昨年と比べると子ども達の様子は年々、落ち着いて来ているように感じた。

具体的には、情緒が不安定でイライラしやすかったり、泣いてしまったり、リーダーを強く叩き続けたり、叫びまわったりする子どもがほとんどいなくなった。キャンプ中もリーダーやお友達同士の中で、子どもが揉めてしまったりすることもなくなった。全体で集まった時もほとんどの子どもが落ち着いて座り、話を聞くことができていた。子ども達から地震や津波、放射能に関する発言も減ってきていた。また、睡眠についても過去2年間と比べて、早目に就寝する子どもが多く、朝もぐっすり眠っている子どもが多かった。

キャンプ中は、川遊びや水鉄砲遊びなど、夏らしい遊びを満喫していたが、6年生の男の子たちには、少し物足りない様子もみられた。今年は、子ども達から「もっと～がしたい!」と遊びに関するリクエストが少なかった。どの遊びも時間を十分にとって、たっぷり遊ぶことができていたせいかもしれない。

② もっとこうしたらよかったなぁと思うこと（自分の役割に対する動き）

各班のリーダーさん同士が、もっとスムーズにコミュニケーションがとれるように、折りを見ながら声かけを行いたかったが、十分にできなかった。

リーダーさんで疲れが見えていたり、リーダーさんが足りていないような班には、もっと積極的に声をかけて、子ども達の相手をしたりして、フォローをしたかった。

1日のプログラムについて、もう少し自分自身、頭の中でイメージしておけば良かったが、そこができておらず、いろいろな部分でお任せになってしまった。

③ キャンプに参加しての感想（自分が感じたこと、変わったことなど）

個人的には3回目のキャンプ参加のため、いろいろなことに関して見通しを持って関わることができ、子ども達ともたくさん遊ぶことができた。

また、このキャンプに何度も参加してくれている子ども達もおり、その成長をこの3年間、見守ることができたことはとても幸せを感じる。来年以降も、ぜひこのキャンプには参加して、支援を続けていきたいと思う。



6. ① チーフリーダーの感想

吉田 夏子（東京YWCAキャンプリーダー／お茶の水女子大学3年）

新地っ子の夏休み 2013

子ども達とのキャンプ中、水鉄砲で遊びながら見せる笑顔、太鼓に向き合う真剣な顔、少し不機嫌な顔など今年もたくさんの表情に出会うことができました。また、前回に比べて、震災に関することを口にする子が少し減った印象があります。一方で、「水道のお水汲んで飲みな」という言葉に対し、「放射能入りの水」といった言葉が返ってくる。「ねえ今何時?」「3時10分だよ、あ、11分になった。」「ふーん、311だね。」ほんの些細な言葉ややりとりが、あのことを思い出す引き金になってしまう。日常と隣り合わせになってしまっているということが、改めて意識づけられました。

リーダー同士の連携が、もっとできたのではないかと思います。今回は、直前に決まったということもあり、リーダー同士がお互いを知る機会がありませんでした。キャンプ場で過ごした前日の時間を、もっと有効に使えたと今では考えています。特に同じグループのリーダー同士のIce Breakと、各々の個性、得意分野などを知ることができていたらグループリーダーはよりやりやすかったのかもしれませんが、それから、グループを越えた子どもたちの交流も、もっとできればよかったです。グループ単位の生活で、どうしてもグループ同士で動き、グループ同士または小学校等の既存の関係性の中での交流がメインとなってしまいました。もちろん、そこから自然発生的に自分の過ごしたい相手と過ごせることが1番ですが…。

細かいことですが、遊び道具の管理が曖昧だったので、例えばキャビンに持っていく道具は1キャビン2つまで、のようにしたら、「あのおもちゃで遊びたいのに全然返ってこない!」というような状況を減らせたと思います。また、生活の中で出てくる、「こんなことやりたいな」を拾って、もっと実現できればよかったです。

「家族の夏休み」という言葉は、去年のキャンプでも聞かれましたが、正直に言うと自分ではそれにはっきりとしたイメージを持っていませんでした。しかし、1年の間に、実際に家族の休みを観察したりすることによって具体的なイメージを作ることができました。好きな時間に好きなことをやる。何も用意しなくても楽しい、自分の旅行を作り上げる楽しさ。親子がお互いを信頼して、晒し合うのだ。それは、私がこれまで抱えてきた「キャンプ」のイメージとは少し違うものでした。自由ということは、それだけ不安も伴いました。プログラムがない、この状況で、4日間、子どもたちはどのように過ごすだろう、楽しかったと思えるだろうか、心配していました。しかし、プログラムがなくてもそこに遊び道具はある、友達もいる、これだけで笑顔は生まれます。無理にこちらが逃さなくても、自分で楽しいことを見つけて、逆に休みたいときは休める、そんなキャンプでした。選択的に、(強制ではなく)歌やゲームなども使って楽しむ時間や空間を作ってもよかったですのかな、とも帰りのバスで考えました。

そして、できることなら、参加希望をしてくれた全ての子どもたちとキャンプがしたい。



6. ② 料理担当ボランティアの感想

青柳 洋子（東京YWCA会員）

キャンプ場は名取川に面し、温泉もある素晴らしいロケーションでしたが、多人数分の食事作りにはあまり適していない普通のキャンピングキッチンでの61人分の食事作りは、ホントに大変でした。メインキッチンですべてを作ることが不可能だったので、おかずだけを作り、手の空いてるスタッフが野菜の下ごしらえ、お鍋の見守りを手伝ってくださり、各キャンピング毎にはご飯炊き・朝食のゆで卵作り、ウィンナーの温めをお願いしました。リーダーと子どもと一緒に鍋を持っておかずを受け取りにきて、各キャンピングで配膳、後片付け。毎食その繰り返し。リーダーはさぞ大変だったと思いますが、子どもたちとの繋がりによかったですのではないかと思います。そしてまた、私たちスタッフも毎食違ったキャンピングで食事を共にし、子どもたちと繋がりを深めることができましたと思います。ほんとに大変だったけど、全員で協力して、それがかえってよかったことにつながった、と感じてるのは私だけでしょうか。そして、慣れない土地での大量の食材の調達は、地元のコープ生協が「新地っ子キャンプ」の為に、私たちの都合に合わせて配達してくださいました。感謝です。

「新地っ子」はなんでも良く食べてくれる、元気な子でした。時々「おいしかったよ」「今日は何作ってるの?」「ミネストローネにセロリ入ってたよね。あまり好きじゃなかったけど、食べたよ。おいしかった」と、笑顔でキッチンをのぞきに來る子もいました。皆様ありがとうございました。



6. ② 責任者より

是常 景子（東京 YWCA 青少年育成事業部職員）

新地町子どもたちとは初めてのキャンプだったので、新しい地域子どもたちと出会う楽しみを感じつつ、3.11 がもたらした不安とどのように向き合っていたら良いか、悩みながらの参加でした。

その中で、私はプログラム進行、青年リーダーたちとの連絡業務、準備を主に担当しました。昨年の振り返りから、今年は子どもたちを「受けとめる」ことができるよう、生活の時間は固定し、間のプログラムはそれぞれ対話の中から決めていくことができるようなスケジュールを組みました。

参加したリーダーたちは、初めて出会う子どもたちを前に、「受けとめる」ってどうしたらよいのだろうと、担当するグループの子どもたち1人ひとりと向き合いながら、その方法を模索している姿がしっかりと見られました。キャンプ中は、過ごし方を子どもたちと話しながら決め、川での生き物や流れを楽しんだり、水鉄砲で全身ずぶ濡れになるまで遊んだり、キャンピングでゆったりした時間をもったり、と対話の時間からキャンプがつくられる形を持つことができました。迷いながらも、1人1人への対応の広がりがあったことで、子どもたちがのびのび過ごす時間がつくり上げられたようでした。

その中で、リーダーが判断に迷うときや、子どもたちの様子について悩むとき、キャンピングの責任者リーダーが参加する夜のリーダー会を持つ以外に、他のリーダーに対しても相談する場を持つことが必要だったと感じました。

準備期間の短さから、子どもたちと生活を共にする経験の少ないリーダーたちは、不安の中で実践に臨んだ人もいたと思います。今までキャンプを実施してきた中での事例と対応を学ぶ時間や、実際に子どもたちの活動に参加し、子どもたちへの声かけや、接し方などを体験する時間を、準備の中で持つことは、リーダー間の共通意識づくりや関係づくりとして、できたらよかったと思うことです。

私自身、青年リーダーの真剣に取り組む姿勢とスタッフたちの親身なサポートに支えられることが多くありました。悩みながらも、子どもたちと全力で遊び、一緒に3泊4日を1人ひとり大切に思いながら過ごしたリーダー・スタッフたちに感謝すると共に、リーダーたちとの生活の中で体験した、普段の不安や緊張からの解放が、少しでも子どもたちがこれから生きていくための力になってくれることを願っています。



6. ② 責任者より

～ 子どもの時間を過ごした子ども達 ～

外山 真理（東京YWCA青少年育成事業部統括責任者）

定点観測のように続けている「新地っ子の夏休み」が3回目を迎えた。今回は財源の目処がなかなか立たず、6月末にようやく実施の運びとなった。新地町教育委員会からは、「子ども達がチラシはまだか、と聞いてきます」と連絡があり、待っている子ども達の顔が脳裏に浮かんで「何とか!」と思う日々だったが、6月末にご寄付の朗報が入り、実施できることになったのだ。子ども達へのお知らせは7月上旬と随分遅くなったが、それでも43名の申込があり、定員30名を35名に増やすことにした。参加出来なかった子ども達は他の保養プログラムに参加したとはいえ、申し訳ない思いが残る。

津波被害の生々しい傷跡が次第に町から消え、穏やかな日常生活が戻ってきているためか、子ども達は落ち着いてきている様子。昨年は「死」を身近に感じていることが窺える言葉が数人の子ども達の口から、あるときはポツリとある時は心霊写真の話題に託してこぼれ落ち、心の中に不可解なものを抱えている様子が見えていた。しかし、今回は時間の経過と共にあの衝撃的な出来事が少し心の奥におさまってきているようだった。それでも放射能への不安が日々の暮らしを覆っており、線量を心配する声は続いている。福島第一原子力発電所事故後の処理が難航している現実を思えば、当然のことだろう。そんな子ども達が多くの青年達、少数の「おばさん」「おじさん」と一緒に暮らし、たくさんの遊びの中で子どもらしい時間を過ごした。家庭や学校から離れたキャンプだからこそ、子ども達は心と体全体で丸ごと体験できたのではないだろうか。そこに子どもだけのキャンプの価値がある。

今回は仙台の秋保温泉にあるキャンプ場で実施したが、20年前にチェルノブイリの子ども達を3週間転地保養のために招待した「ゆめの森」で陶芸体験や日本の芸能体験もしたが、ご協力くださった陶芸家の大場さんから、「20年後に再び子ども達を招くことになったことに大人の責任を感じます」と、キャンプ終了後その思いが届けられた。

短い準備期間だったために十分なチームワークを作れないまま突入した「新地っ子の夏休み」。青年リーダー達は本当に大変だったと思う。お詫びと共に心から感謝したい。そして、今年も子ども達に会えて本当によかった。別れ際、子ども達は目をキラキラさせながら「来年も絶対やってね。忘れないでよ!絶対だよ」という言葉を私にもしっかり言い残していった。未筆ながら実施の道を開いて下さった多くの方々、諸機関の皆様にご心より感謝申し上げます。



7. スタッフ紹介

責任者

外山 真理 (公益財団法人 東京YWCA 青少年育成事業部 統括責任者)
寺出 壽美子 (NPO法人 日本こどもソーシャルワーク協会 理事長)
(東邦大学薬学部講師／東京YWCA青少年育成事業部会委員)
是常 景子 (公益財団法人 東京YWCA 青少年育成事業部 幹事)

チーフリーダー

斉藤 崇 (NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会 事務局)
吉田 夏子 (公益財団法人 東京YWCA キャンプリーダー／お茶の水女子大学 3年)

キャンプリーダー

石村 正憲 (NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会)
上野 星良 (明治大学 1年)
浦上 宏太 (明治大学 4年)
岡本 育恵 (明治大学 3年)
上遠野 智美 (明治大学 3年)
川合 一輝 (明治大学 4年)
下田 明莉 (明治大学 3年)
鈴木 慧 (明治大学 1年)
佐々木 龍樹 (NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会／武蔵大学 3年)
谷口 智美 (明治大学 4年)
千田 陽平 (NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会)
徳留 有香 (NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会／専修大学 3年)
仲澤 彩亜 (明治大学 3年)
中野 亜矢子 (明治大学 3年)
波多野 葉子 (NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会／慶應義塾大学 4年)
平澤 健太郎 (NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会／武蔵大学 3年)
松本 知里 (明治大学 3年)
森屋 隆紀 (明治大学 3年)

料理担当

青柳 洋子 (東京YWCA会員)

カメラマン

白井 裕介

協力

久田 満 (上智大学教授、医学博士／臨床心理士)



8. ご協力いただいた方々、機関、団体のご紹介

～ 感謝を込めて ～

- 新地町教育委員会
- 石神窯 大場 拓俊
- 民族歌舞団ほうねん座
- NPO法人 日本子どもソーシャルワーク協会
- 明治大学震災復興支援センター
- 上智大学コミュニティ心理学研究室
- 東洋英和女学院
- 三菱商事株式会社





9. 資料

案内チラシ



公益財団法人東京 YWCA

新地っ子の夏休み2013



仙台の秋保温泉のキャンプ場に行くよ！
思いっきり楽しい夏休みを過ごしましょう！
久しぶりの子も初めての子も、みんなで会えるのを
楽しみにしているよ！

期 間●8月18日(日)～21日(水)3泊4日
場 所●木の家ロッジ村(仙台市太白区秋保町湯元字馬乙2-1)
対 象●福島県新地町の小学3～6年生 25名、中学生5名(定員を超えた場合は抽選となります)
参加費●5,000円(食費の一部として)
お申込●裏面の参加申込書に記入の上、7月18日(木)までに在籍している小学校にご提出ください。

▼参加されるお子さまには、詳細のご案内をお送りします■

【往復に使う交通機関】貸切バス 所要時間約1時間半

参加者対象の説明会

内容、キャンプ場、スタッフ体制、安全管理、持ち物などについてご説明します。
日時：7月30日(火) 18:30～19:30
場所：新地町農村環境改善センター大集会室

後援：新地町教育委員会
協力：NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会、上智大学コミュニティ心理学研究室
明治大学震災復興支援センター

*東洋英和女学院、 三菱商事 の資金的援助により実施いたします。

主催 公益財団法人東京YWCA被災者支援プロジェクト

企画実施 青少年育成事業部教育キャンプ課
101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-8-11

Tel.03-3293-5466 Email:petau@tokyo.ywca.or.jp ホームページ <http://www.tokyo.ywca.or.jp/>



9. 資料

アンケート

東京 YWCA 「新地っ子の夏休み 2012」アンケート

記入上のお願い

- ・アンケートは、お子様一人につき一部ご回答下さい。
 - ・ご回答は、できるだけお父様かお母様をお願い致します。
 - ・ただし、Q1、Q3、Q4、Q6 に関してはお子様の意見をお尋ね下さい。
 - ・回答ずみのアンケートは、9月7日までにご返信用の封筒に入れて投函下さい。
- お忙しいところ誠に恐縮ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。

Q 1. 今年のキャンプの日数（3泊4日）についてはどう思われますか？

1. 適切 2. 短すぎる 3. 長すぎる

Q 2. 開催時期についてはどう思われますか？

1. 8月上旬が良い 2. 8月中旬が良い 3. 8月下旬が良い
4. 夏休み中ならいつでも良い

Q 3. キャンプ中の食事は全体としていかがでしたか？

1. おいしかった 2. ふつう 3. おいしくなかった

Q 4. キャンプリーダー（若いお兄さんやお姉さん）の対応はどうでしたか？

1. とても良かった 2. 良かった 3. ふつう 4. あまり良くなかった

＊ キャンプリーダーに対して伝えたいことがありましたら、ご自由にお書きください。

2013.8



PHOTOS



ENJOY





公益財団法人東京 YWCA

101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-8-11

Tel.03-3293-5421(代表)

Fax.03-3293-5570

HP : <http://www.tokyo.ywca.or.jp/>